

アイヌ文化の発信と地域経済の活性化

～ともに進める釧路市阿寒湖温泉地区のまちづくり～



民芸品店や飲食店などが並ぶ阿寒湖アイヌコタン

アイヌ文化を伝承・発展させるとともに、地域経済の活性化を図っていく——この両輪で地道なまちづくりを展開してきたのが、釧路市阿寒湖温泉地区です。地域の基幹産業である観光産業の発展に向けて、これまでさまざまな取り組みが展開されてきました。ここではアイヌと和人が協力し合いながら、文化の伝承と発展を実現してきた歴史が見てとれます。釧路市阿寒湖温泉地区の歴史をたどりながら、共生社会に向けた実践的な取り組みについて紹介します。

歴史ある「まりも祭り」と「阿寒湖アイヌコタン」

道内有数の温泉観光地として知られる釧路市阿寒湖温泉地区。この周辺一帯は1934年に国立公園に指定されていますが、貴重な自然が現在まで守られてきた背景には、(一財)前田一步園財団の存在が欠かせません。

同財団の前身は、阿寒前田一步園です。薩摩藩出身で農商務省次官や貴族院議員を経験した前田正名は、

1906～11年にかけて阿寒湖畔の山林を北海道国有未開地処分法に基づいて取得しました。正名は自らの家や土地を一步園と名付け、「前田家の財産はすべて公共事業の財産とする」ことを家訓としていました。正名は1921年に亡くなりましたが、晩年「阿寒の自然はスイスに勝るとも劣らぬ。この山は伐る山でなく観る山だ」としばしば口にしていたそうです。

正名は汽車の中で、陳情のために国に向くアイヌの長老(エカシ)に出会ったことがあるそうです。そのときに「阿寒にしるどこにしる、君たちが先住者で先覚者なんだから、君たちの居場所がなくなるようでは、その土地は決していいものにはならない。君たちが東京に行かなくても、自分が引き受けて一生懸命やってやろう」(『前田一步園財団20年の歩み』より)と、口にしました。

阿寒の森を引きついで二代目園主で次男の正次は、「伐る山ではなく、観る山」を実践し、「自然は公共の財産」と常に言っていました。そして、その思いは三代目園主となった妻の光子に引き継がれ、豊かな自然が守られてきました。光子は1983年に亡くなるまで、

義父や夫の遺志として、アイヌの人たちへの敬意を忘れず、常にアイヌの人たちの暮らしに気を配っていました。

その昔、阿寒湖はアイヌの狩猟場で、もともとコタン（集落）はなかったのですが、のちに阿寒湖周辺にアイヌの人たちが住むようになり、分散して生活していました。そこで光子はアイヌの人たちに無償で土地を貸与することを提案し、1959年、阿寒湖周辺だけでなく釧路や白糠、十勝、旭川など、道内各地からアイヌの人たちがやってきて住み着くようになりました。アイヌの人たちの集結を図るとともに、中央にはいろいろな行事ができる広場をつくり、民芸品を生産できる共同作業場も設置されました。アイヌの人たちは民芸品の製作と販売をし、有名な木彫家も輩出するようになりました。「阿寒湖アイヌコタン」にはそんな歴史があります。

また、光子はこのコタンに住むための条件として、そこに住む権利をほかの人に移譲するときやもめ事があったときのために調整委員会をつくること、アイヌ文化を継承していくことを提示したといいます。アイヌの人たちからは「ハポ（お母さん）」と呼ばれ、

亡くなるまでアイヌ文化の保存や伝承、発信など、さまざまな場面で支援をしていたそうです。

阿寒湖では、1950年から「まりも祭り」が開催されています。トーラサンベ（湖のみたま）やトーカーリップ（湖をめぐるもの）などと

呼ばれていた阿寒湖のマリモは、1921年に天然記念物、1952年に特別天然記念物に指定されていますが、阿寒湖の観光客が増えてくると、ひそかに持ち帰る旅行者や大量に採取して売る人などが出てくるようになりました。また、地元の漁民が岸辺に露出したマリモを発見するなど、マリモの保護に危機的な状況が認識されるようになりました。

そこで、地元でマリモ愛護会（現在は「阿寒湖のマリモ保護会」）が結成され、この年から「まりも祭り」が始まり、2019年に70回を迎えました。阿寒湖温泉地区でアイヌの人たちと和人が一緒に協力して取り組んできた伝統ある祭りといえるでしょう。

阿寒アイヌ工芸協同組合の代表で、第65回から「まりも祭り」の司祭を務めている西田正男さんは「第1回のときに母が民族衣装を着て出かけていく姿をよく覚えています。それがアイヌ文化を意識した最初でした。マリモの大切さを喚起させることが目的でしたが、当時の長老や有志たちを尊敬します。今でこそ自然保護が叫ばれていますが、昔から自然を守ることをしっかり主張していたのですから」と、先輩たちの奮起を



「伐る山から観る山へという考え方があったから、今がある」と話してくれた西田さん



マリモを湖に送る儀式（上）やまりも行列などが行われる「まりも祭り」

思い出します。

また、祭りには、道内各地からアイヌの人たちが集まってきたと言います。「ここでみんな一緒に歌ったり踊ったりしましたが、まりも祭りでアイヌに目覚めたという人も多かった」と、民族としての誇りを持って交流を深める場になっていきました。

豊かな自然、それを守る前田一歩園財団、自然を尊重するアイヌの人たちの教え、道内各地から集まってきた阿寒湖アイヌコタンの住民たち。さまざまな担い手や要素が組み合わさって、阿寒湖独特の共生の気風と文化が育まれてきたようです。

みんなで進める阿寒湖温泉地区の観光まちづくり

道内各地からアイヌの人たちが阿寒湖アイヌコタンに移り住むようになり、観光客が増加していく中で始まったのが、オンネチセでの伝統芸能の披露です。

祭りなどの催し、民族舞踊、民芸品の販売など、阿寒湖アイヌコタンは地域の観光振興に大きく寄与してきました。

アイヌ文化の伝承という点では、1968年にアイヌ民族文化保存会が設立され、ユーカラ座が組織されています。ユーカラ座では、口伝えで受け継がれてきた物語を舞台化し、これまでフランスのパリをはじめ、台湾、ブラジル、ニュージーランドなどで公演を行い、世界にアイヌ文化を発信してきました。1984年には伝承・保存するアイヌ古式舞踊が国の重要無形民俗文化財に指定されています。

ユーカラ座の蓄積は、観光客に披露するアイヌ古式舞踊やユーカラ劇などに生かされてきました。伝統を引き継ぎながら、一方で商業的な観点での芸能も発展させてきたといえ、アイヌ文化は温泉とともに阿寒湖温泉地区の特徴的な観光資源になりました。

しかし、昭和期には増加傾向をたどっていた観光客

数も、1998年をピークに減少傾向に転じます。また、このころには阿寒湖温泉の宿泊者の多くが団体客で、滞在時間が短く、飲食店など観光客のニーズに対応できていない状況や、住民の定住意識の低さなどが浮き彫りになっていました。

そこで、阿寒観光協会などがこの状況を打破しようと、関係者に幅広く声をかけ2000年度に「阿寒湖温泉活性化戦略会議」を発足させ、まちづくりの再生プランが検討されました。翌年度には「阿寒湖温泉まちづくり協議会」が立ち上がり、地域住民の人たちも熱心に参加して阿寒湖温泉地区のまちづくりを議論。10年後を見据えた「阿寒湖温泉再生プラン2010」が策定されました。プランでは滞在型の観光地を目指し、自然を尊重することなど3つの方針が掲げられたほか、「住んでよし、訪れてよし」という住民と観光客の視点からまちづくりを進めていくことが示されました。住民が集まる会議にはアイヌの人たちも積極的に参加しています。プランの冒頭には、アイヌのメンバーからの提案による「まりも家族憲章」が掲げられ、「自然」、「訪れる人」、「住民」にやさしいまちづくりの理念がうたわれています。

これらの議論を踏まえて2005年7月には阿寒観光協会と阿寒湖温泉まちづくり協議会が統合、発展する形で、「NPO法人阿寒観光協会まちづくり推進機構」が発足しました。地域が一体となって観光地づくりを進めるDMO^{※1}の先駆けといえます。先ほど登場した西田さんは同機構の副理事長を務めています。

釧路市の中での阿寒湖温泉地区

2005年10月に旧阿寒町は旧釧路市、旧音別町と合併し、新しい釧路市となりました。旧阿寒町にとって釧路市との合併は、観光振興をより広域的、重点的に進めていく契機になります。

※1 DMO
Destination Management/marketing Organizationの略。地域の多彩な関係者を巻き込みつつ、科学的アプローチを取り入れた観光地域づくりを行う舵取り役となる法人のこと。



観光情報が集約されている「阿寒湖まりむ館」



「阿寒湖アイヌシアター イコロ」

2009年には観光インフォメーションセンターなどがある「阿寒湖まりむ館」がオープン。2012年にはそれまでアイヌ古式舞踊を披露してきたオンネチセが老朽化してきたことから、わが国初のアイヌ古式舞踊専用劇場「阿寒湖アイヌシアター イコロ」も開業しました。これは、アイヌ文化の伝承と保存・普及、地域観光の振興や地域経済の活性化、さらに住民と観光

客との交流促進を目的に、産炭地域活性化基金を活用して釧路市が整備し、阿寒アイヌ工芸協同組合などで構成する阿寒湖アイヌシアター運営協議会が運営しています。

全国的に知られる阿寒湖温泉の存在は、観光分野における釧路市の知名度を高めたといえるでしょう。合併を契機に釧路市は、観光ビジョンの策定に取り組むなど交流人口や観光消費を増やす政策に力を入れます。今では夏の長期滞在者数で道内随一のまちになっています。温泉街と都市部という互いの地域の優位性を生かしながら、連携を図ることで観光誘客の幅が広がっています。

また、2013年には旧阿寒町時代に議論があった阿寒湖温泉の入湯税のかさ上げについての再検討が始まり、2015年に阿寒湖温泉のホテルの入湯税が150円から250円になりました。この財源は、阿寒湖温泉地区の環境整備やおもてなし事業に活用されていますが、観光地が独自のまちづくり財源をつくりあげた先事例として注目を集めました。この資金を活用して、温泉街の玄関口を整備する阿寒湖フォレスト・ガーデン構想が進められており、2018年には駐車場が整備されました。観光地としての魅力をハード面から高めていく取り組みも始まっているのです。

こうした取り組みを後押しするように、外国人旅行者に選ばれる地方の観光地づくりのモデルケースを形成する「観光立国ショーケース」や、日本の国立公園を世界の旅行者が長期滞在したいとあこがれる旅行の目的地にする「国立公園満喫プロジェクト」などに釧路市が選定され、さまざまな事業が進められてきました。これらの国のプロジェクトでは、アイヌ文化を尊重した目標像やキーワードが掲げられていて、阿寒湖温泉地区の大きな特徴としてアイヌ文化が共通認識として定着していることがわかります。



ヨシダナギ氏が撮影した「ロストカムイ」のイメージフォト。「イコロ」での上演時間は毎日21:00～、土・日・祝日は15:00～の2公演（写真提供：阿寒観光協会まちづくり推進機構）

新しいアイヌ文化の創造と発信

2020年のウポボイ（民族共生象徴空間）開業を前に、阿寒湖温泉地区では新しいアイヌ文化を創造、発信する取り組みが積極的に進められてきました。

2019年3月には「阿寒湖アイヌシアター イコロ」でデジタルアートと現代舞踊、アイヌの古式舞踊を融合させた新しい演目「阿寒ユーカラ ロストカムイ」

の上演がスタート。カムイの中でも特別な神とされてきた「ホロケウカムイ」（エゾオオカミ）をテーマにしたオリジナル作品です。

阿寒アイヌ工芸協同組合理事で舞台監督を務める床州生^{とこしゅうせい}さんは「アイヌの文化を尊重し、愛情を注いで



「出会った人との縁を大切にアイヌ文化を楽しく発信していきたい」と言う床さん

くれる人たちと作った舞台。本当にいい仕事ができたと満足げに語ります。この演目によって、イコロでは20、30歳代の観客が増え、新しい客層が開拓されました。映像や音楽の工夫、世界の少数民族を撮影してきた写真家ヨシダナギ氏による迫力ある写真、さまざまなプロモーション活動など、ねらいどおりの成果を上げています。

床さんが関わったもう一つの新しい取り組みが、同年7月にスタートした夜の阿寒湖の森を散策するナイトウォーク「KAMUY LUMINA」^{※2}です。阿寒湖に伝わるフクロウと小鳥のカケスのアイヌ伝説の物語を、光と音、プロジェクションマッピングで幻想的に演出したプログラムで、体験型の夜のアクティビティの一つとなりました。

さらに10月には東京で「アイヌ クラフツ 伝統と革新—阿寒湖から—」が開催されました。これはデザインとクラフトの橋渡しをテーマに、衣類や家具、雑貨などのアイテムを展開する「ビームス」のレーベル「フェニカ」と、阿寒湖に住む若手作家がコラボレーションして、2年ほど前から進めてきた商品づくりのプロジェクトで、完成したバッグやアクセサリ、木工製品などを販売し、ほぼ完売になるほどの大盛況でした。

このほかにもいろいろな取り組みがあり、阿寒湖温泉地区では、アイヌの伝統を生かしつつ、多様な人たちと共同して、独創的なアイヌ文化を創り出し、発信していこうといううねりが起きているのです。

交付金を活用して、さらなる充実を

2019年5月にアイヌ施策推進法が施行され、文化振興や福祉施策、地域振興、産業振興、観光振興などを支援する交付金制度がスタートしました。釧路市も5カ年のアイヌ施策推進地域計画を策定し、同年9

※2 「KAMUY LUMINA」

カナダ・モントリオールに本拠地を構える最先端のマルチメディア・エンターテインメント・カンパニー、モーメント・ファクトリー社と阿寒湖温泉地区に住むアイヌの人たちが一緒につくり上げた体験型のプログラム。2020年度は新型コロナウイルス感染症対策のため中止となっており、2021年に再開予定。

月に認定を受け、昨年度から交付金を活用した事業がスタートしています。

例えば、好評を博した「ロストカムイ」は1年ほど上演した後、交付金を活用したアイヌ文化関連観光プロモーション事業として、内容をブラッシュアップしました。演出家に夏木マリ氏を招いて、ダンサーも女性から男性へ、夏木氏自らによるナレーションも加わりました。当初からリニューアルを考えてはいたものの、「ロストカムイ」を鑑賞した夏木氏自身からの声かけがあったそうで「成功していたプログラムだったので悩みましたが、思い切ってお願いすることにしました」と床さん。夏木氏との出会いは、舞台に立つ心構え、どのように舞台を作り込んでいくのかなど、さまざまな気付きがあったと言います。

また、アイヌ文化フェスティバル開催事業として、2020年2月15、16日に、互いに交わるという意味のアイヌ語を用いた「阿寒ユーカラ ウタサ祭り」を阿寒湖氷上で開催。初日は、阿寒アイヌを代表する歌手や踊り手たちとアイヌ文化を愛する和人アーティストたちによるライブセッション、2日目は阿寒アイヌの母娘によるユーカラ（口承文芸）の披露と語りな

どが行われました。この模様の一部は、動画サイト「YouTube」で視聴できます。画面からは会場の熱気とともに、アイヌと和人が互いに交わって次第の一つになっていく様子が伝わってきます。この祭りにも関わった床さんは「アイヌ文化を伝えるために、継続できるプログラムにしていきたいかった。自分たちで完結するのではなく、映像に残して発信する。交付金は税金ですからよく費用対効果と言われますが、お祭りをして終わりましたではなく、その奥に物語が続いていくようなことをやっていかなければいけない」と、若い世代を意識した思いがあるようです。

かつて古式舞踊などを披露していた阿寒湖アイヌコタンにあるオンネチセも、伝統的な儀式体験、木彫や刺しゅう、ムックリなどの製作体験、アイヌ料理体験などができる空間として改修が進んでいます。

この8月からは「Anytime, Ainutime!」をコンセプトに、地元アイヌが案内してくれる阿寒湖アイヌ文化ガイドツアーもスタートしています。森の散策やムックリの演奏体験、刺しゅうや木彫体験などが楽しめるプランで、アイヌ料理が味わえるオプションもあります。このツアー商品のPRや人材育成、環境整備などにも交付金が活用されています。

このガイドツアーの背景には、2017年度から北海道観光振興機構の補助金を活用して、3カ年にわたって道内6地域のアイヌ民族関係団体らが、各地のアイヌ文化や観光資源をつなぐ広域の周遊ルート「ユーカラ街道」づくりを目指して、それぞれの体験プログラムを検討してきた経緯があります。その蓄積を生かして商品化にこぎつけ、有効に交付金を活用した例といえます。一方で、アイヌ政策推進交付金は市町村が対象のため、「ユーカラ街道」のような広域的な事業での展開が難しいことは、交付金制度の今後に向けた課題の一つといえるでしょう。

釧路市では、阿寒湖温泉地区だけでなく、旧釧路市



音楽専門チャンネルでも放送された「ウタサ祭り」の初日のライブ（下）。2日目は心に響く母と娘の語りなど、アイヌ文化を深く掘り下げる内容となった（写真提供：阿寒アイヌ工芸協同組合）



アイヌが案内役となり、森の中などを散策する阿寒湖アイヌ文化ガイドツアー（写真提供：阿寒アイヌ工芸協同組合）

の春採生活館などを核に、高齢者が保有するアイヌの文化知見を伝承・共有化する事業や、釧路市立博物館アイヌ文化展示コーナー強化事業なども進められています。ユニークなところでは、^{カムイ}神々に逢える釧路市動物園整備事業として「イオマンテ（熊の霊送り）」や、アイヌの人々の暮らしと野生動物について紹介するプログラムの検討、その実施の場の環境整備や園内のチセと小熊の家の整備などがあります。知恵を絞って交付金を活用していこうという意欲がうかがえます。

これらは交付金事業のほんの一部ですが、こうしたさまざまな事業が展開できる背景には、阿寒湖アイヌコタンの歴史と蓄積、アイヌと和人が一緒にまちづくりを担ってきた時間があったからといえるでしょう。

「昔はアイヌと和人が反発していたこともありましたが、将来に向かってまちづくりを一緒に取り組む動きで変化が出てきました。そこではリーダーとしての大西雅之さん（阿寒観光協会まちづくり推進機構理事長）の役割は大きいですね。彼がリーダーになってから、本当に仲が良くなりました」と西田さん。また、床さんは「イコロの踊り手には、アイヌでない人もいます。アイヌ文化に対して愛情や尊敬する気持ちがあれば、

舞台上立つ人はアイヌにこだわっていません」と、アイヌ文化を伝えていく担い手を広く捉えています。

床さんが「阿寒のアイヌはハイブリッドなところがある」と言うように、異種のを組み合わせて、新しいものを創り出す気風が育まれてきたようです。道内各地からやってきたアイヌが結集していることもその要因の一つでしょう。

阿寒湖温泉地区では、アイヌと和人が寄り添って、アイヌ文化を伝承・発展させながら、基幹産業である観光産業を活性化させ、まちづくりに取り組んできたといえるでしょう。

アイヌ施策推進法の制定とウポポイの開業によってアイヌ政策は新しい段階に入りました。これまでの文化振興や福祉施策に加えて、地域振興、産業振興、観光振興に向けた施策をアイヌの人々に寄り添いながら具体的にどのように進めていくのか、新たな政策に向けて、幅広い地域で挑戦が始まっています。阿寒湖温泉地区における共生の歴史と経験は、多くの地域にとって一つの参考になるのではないのでしょうか。